37 テーマ別 随筆

標準問題

1 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。〈徳島〉

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず。人の数多ありける中にて、ある者、「*ますほの薄、まそほの薄などといふ事あり。*わたのべの聖、この事を伝へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「簑笠やある、貸し給へ。かの薄の事習ひに、わたのべの聖のがり尋ねまからん。」と言ひけるを、「あまりにも物騒がし。雨やみてこそ。」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるるものかな。人の命は、雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや。」とて、走り出でて行きつつ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゆしくありがたう覚ゆれ。「敏きときは則ち功あり。」とぞ、論語と言ふ文にも侍るなる。

（注）ますほの薄、まそほの薄＝穂が赤味を帯びたすすきのこと。どちらも同じすすきの呼び方。
わたのべの聖＝渡辺（地名）に住む修行者。

(1) 線「思は」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

(2) ――線ア～エのうち、主語が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

(3) この古文で述べられていることとして正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人からの忠告や激励に応えて、自分の知らない知識をもつ人をすぐに訪問し習得した登蓮法師の生き様に筆者は感心している。

イ 天候の善し悪しや人の非難に惑わされず、自分の力で学べないものはないと信じ行動した登蓮法師の生き方を筆者は評価している。

ウ ある知識をもっている人がいると知って、何をおいてもその人のもとを訪ねて学んだ登蓮法師の生き方を筆者は称賛している。

エ 誰かが珍しい知識を得たと聞いて、誰よりも早くそれを手に入れることを求め続けた登蓮法師の生き様に筆者は賛同している。

(4) ――線「敏きときは則ち功あり。」とありますが、この言葉で示されたように登蓮法師が行動したのは、法師自身がどのように考えたからですか。「薄」「命」という二つの言葉を使って、「……と考えたから。」に続くように、二十五字以上三十字以内の現代語で書きなさい。

と考えたから。

出題傾向
- 「随筆」は、筆者の体験などから生じた思いや考えを述べたもの。
- 古典随筆では、「枕草子」（清少納言）や「徒然草」（兼好法師）が代表的。
- 筆者が何のどのようなところに心を動かされているかを読み取ろう。

2　次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。　〈千葉〉

麾下の士何某の*町奉行になられし時、*堀田筑前守殿の「必ず相手にならぬやうにあれかし」と申されしに、何某其時は合点ゆかざりしが、訟をきくにいたりてはじめて①心付きしといはれしとぞ。訟をきくは公の事ながら、悪しとおもひ、むつかしとおもへば、必ず其人を②我が相手とおもふやうになるものなり。我詞するどくなれば、其人③言を尽くすことあたはず。必ずかたききになりて、取さばき平らかならず。相手になるなといはれしは*金言なりと、④子孫にもいひ置かれしとなり。

（「筆のすさび」より）

（注）町奉行＝江戸町奉行。主に町人地の司法・行政・治安維持を担う。
堀田筑前守殿＝堀田正俊。江戸時代前期の大老。
金言＝人生や生活のうえで手本とすべき内容をもつ優れた言葉。

(1)　――線①「心付きし」の主語にあたるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　麾下の士何某　　イ　堀田筑前守殿
ウ　其人　　エ　子孫

□

(2)　――線②「我が相手」とは、どのような相手ですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分が判決を下した相手
イ　自分に訴えを願い出た相手
ウ　自分が頼りにする相手
エ　自分の争いの相手

□

(3)　――線③「言を尽くすことあたはず」とありますが、この内容についての説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　相手と対面すると、奉行は緊張して判決を下すことができない。
イ　奉行は、相手の感情に流されて言葉を口にすることができない。
ウ　奉行の言葉に威圧され、相手は十分に主張することができない。
エ　奉行に疑惑の目で見られて、相手は言い逃れることができない。

□

(4)　――線④「子孫にもいひ置かれしとなり」とありますが、その理由についてまとめた次の文の□に当てはまる言葉を、五字以内の二文節で書きなさい。

▪人の話をよく聞いて□をするように心がけることは、人生や日常生活においても大切なことだから。

□

アドバイス

随筆は、筆者の考えや感慨などを文章にしたものなので、筆者が何に対してどのように感じたのかを捉えることが、主題を理解するうえで重要になる。エピソードが紹介されている場合は、誰のどのような言動について、筆者がどのような評価をしたのかを読み取ろう。